

キュウリ養液栽培による早進多収生産技術の確立

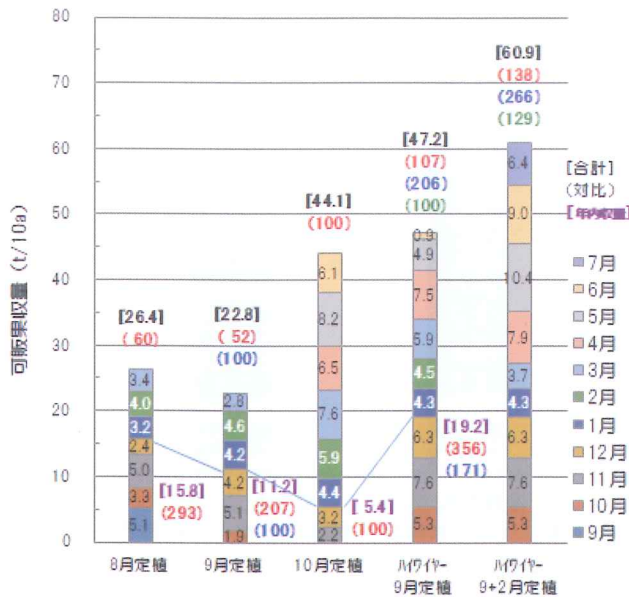


図1 定植時期および誘引方法が養液キュウリの可販果収量に及ぼす影響 (2019-2020 '常翔661')
注) 定植日: 8月5日、9月5日、10月4日、2月10日



写真1 年2回作区の7月の草姿と着果の様子

促成キュウリでは、販売単価の高い9～11月出荷を目指すため、定植時期を早める早進化栽培技術の開発が望まれています。当センターでは、養液栽培において初期の着果安定や作期延長できる技術等を検討し多収生産技術の確立を目指しています。ここでは、'常翔661'の早進化栽培における生育・収量特性を紹介します。

まず、8月、9月定植区を設け、慣行の10月定植区と比較しました。8月定植では9月の雄花節率が高く、また、8月、9月定植のいずれでも9～12月の流れ果率が高くなりました。定植時期が早いほど、誘引枝の節数増加量、雌花開花数が著しく多く、年内収量は、8月定植では193%増の15.8t/10a、9月定植では107%増の11.2t/10aとなりました(図1)。しかし、8月定植では12月、9月定植では1月から誘引枝に萎凋症状が見られ始め、3月には栽培継続が困難となりました。定植時期を早進化することで、萎凋症状の発生も早まり、長期栽培が難しいことが明らかとなりました。

次に、9月定植において高軒高ハウスにおけるハイワイヤー誘引について検討しま

した。ハイワイヤー誘引では慣行のつる下げ誘引と比べ、10～12月には雌花開花数が多く、10、11月には流れ果率が低く、年内収量は71%増の19.2t/10aとなりました。また、萎凋症状の発生も少なく、合計収量は106%増の47.2t/10aとなりました(図1)。

また、ハイワイヤー誘引では、9月に定植し2月に植え替える年2回作も検討しました(写真1)。年1回作では、5、6月に萎凋症状が発生し減収したのに対し、年2回作では、4～7月に著しく多くなり、合計収量は29%増の60.9t/10aとなりました(図1)。

これらのことから、定植時期を早進化する長期栽培では年2回作が適していると考えられました。また、過去の月別販売単価から試算すると早進化により収入が著しく向上することも明らかとなりました。

令和2年度には、慣行ハウス・高軒高ハウスにおける8月定植での年2回作、初期着果安定と省力化のための更新摘心、生育診断のための生体情報の取得方法等について検討していきます。

(先端生産システム第二担当 下藤優子
088-863-4918)